

仏様のおはなし新シリーズ第77集 その2 「本当のじつ」

もう、今から6年前の話です。

「お父さん、年取ったよね〜」

当時九才の娘が、いきなり私に言ってきました。突然そんなこと言われた私は、心も体も固まっちゃいました。さすがに若者だとは思っていませんでしたが、「年取った」なんて言われると、「どこが？何が？どうして？私が？」と

少なからずパニックです。

「え、どうして突然そんなこと言うの？」

私が聞き直すと、次の一言。

「えー、だって、もう40じゃん」

確かに、40才になっていました。自分ではいつも言っていたんです。

「私も40.年取りました」なんて。でも、人から言われて固まるってことは、本当にそうは思っていないってことでしょ。よね。

人は、年若い、病んで、そしていずれ別れていかなければならない。

お釈迦さまは、私たちのいのちの姿をこう示され、「思い通りになるようなものでも、するようなものでもない」とお諭し下さいます。

でも、それを自分のことだと思えない、思いたくない私があります。

人は、ではないんだ。私が生きていくということは、年若いしていくことだし、病んでいくこともあるし、そして別れていかなければならないものを背負っている、ということなのです。

このいのちをどう生きていくのか、その道を示されたのが仏教です。

死んだら終わり、ではない。そんな空しい人生を送らせたりはしないと願われた、仏様の心を聞いていくのです。

ちなみにその日は、悔しいので娘を使つたささやかな抵抗を試みました。

「じゃあ、お母さんはどうすんだよ？」

私より一つ年上の連れ合いを引き合いに出してみました。

「どうして？」

「だってこの人、40になってからもう一年以上たってるよ。」

娘は流石、躊躇も恐れもまるでなく、

「うわ、お母さんヤバッ」

こちらの予想通り、いや期待以上の返事をしてくれました。ただし、その会話を聞いていた妻から私に送られた視線は、未だに忘れることができません。

簡単に「自分のこと」とは受け容れられない私、そして妻の姿がありました。

